

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立淀橋第四小学校

■ 学校の共通目標

【HP公開用・様式1】

授業作り	重 点	○児童の「意欲を高める」「理解を深める」授業を実践する。基礎的・基本的な学力を確実に定着させるとともに、それを活用し主体的・対話的な授業の充実を図る。
環境作り		○一人1台タブレット端末を効果的に活用し、個別最適化された学び・協働的な学び・家庭と連携した学び等の充実を図る。ICT機器を効果的に活用し、児童の驚きや発見を導き、理解を深める。ユニバーサルデザインの視点から個に応じた学びの充実を図る。

■ 学年の取組について

学 年	学校が取り組む目標 (日常の授業の様子から)	目標達成のための取組	中間評価 ☆成果と●課題	中間追記	2月最終評価
1 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ひらがなの読み方については、概ね理解しているが、繰り返し練習し、定着させる必要がある。 ・すすんで読書をする児童が多い。 ・個数の多少を1対1対応の方法で比べる活動では、問題場面に合わせて、「多い、少ない」など様々な表現で発表することができていた。 ・数量の大きさを表す順番と数字が対応していることは概ね理解できている。数の構成については具体物を使って繰り返し作業する必要がある。 ・積極的に挙手しているが、自分の考えや思っていることを分かりやすく伝えることが難しい児童が多い。場に応じた話型を繰り返し指導する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ①図書室の活用と読書環境の充実 ②紙のドリル教材やプリントを使った反復学習 ③具体物、半具体物を活用する学習 ④ICT機器を活用した学習 ⑤デジタルドリルの活用 ⑥自分の考えや意見を言語化する機会の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ☆図書の時間等を活用し、すすんで読書をしている。また、国語の学習と関連付けた本を借りることで、興味をもって本を読む児童が増えた。 ☆プリント学習やドリルパークを繰り返し活用することで、数の構成のイメージをもてる児童が増えた。引き続き、具体物やICT機器を用いて視覚的に数の構成について理解を深めるとともに、反復学習で学んだことを定着できるようにする。 ●積極的に挙手をする児童は多いが、自分の考えを分かりやすく伝えることに課題が見られる。国語の学習だけでなく、朝の会にスピーチや他の教科等でも話型を提示し、継続して指導していく。 ●ひらがなの読み方については理解できているが、言葉をまとまりとして読むことに課題が見られる。家庭学習、普段の授業での音読を通して、言葉をまとまりとして読めるよう、引き続き指導していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・促音・拗音を抜かしたまま、文章を書く児童が多い。文章を書いた際には声に出して読み直すよう指導を継続していく。 ・文章問題において加法、減法の立式ができない児童が多い。文章問題の意味を理解できるよう、絵や具体物を提示し、立式できるようにする。また、問題文の必要な部分に線を引くことで、立式の助けとなるようにする。 ・ひらがなを書くことに慣れてきて、筆順やとめ・はね・はらいが疎かになっている。改めて丁寧に書くよう指導する。 	
2 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・既習のひらがな・カタカナ・漢字について、概ね読み書きはできているが、誤字脱字や句点のうち忘れが多く、文意識を育てていく必要がある。 ・文章を読むことに抵抗感はないが、根拠となる部分を基に想像を広げ、話全体の内容を正確に理解する力が必要である。 ・加減計算で繰り上がりや繰り下がりのないものは概ね理解できているが、問題文から立式をするのに、内容を正しく読み取る力を身に付ける必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ①読書の記録カードの活用と読書環境の充実 ②週末の日記の課題 ③場面や段落ごとにキーワードの書き出し ④デジタルドリルの活用 ⑤文章問題の反復練習 ⑥具体物を取り入れた学習 	<ul style="list-style-type: none"> ☆これまで、様々なジャンルの本を紹介したり読み聞かせをしたりして、物語文や説明的文章への関心が高まっている様子が読書の記録から分かった。また、読んだ本の交流を児童同士で様子が見られるようになった。 ☆物語文でキーワードの書き出しを行ったことで、文章から大事な言葉を探せるようになってきた。知らない言葉も多いので、授業の中で補足しながら内容の理解につなげている。 ●具体物を操作する活動を取り入れているが、個人よりもペア・全体での取組の方が、正確に理解している。相談や説明など対話を通して、考えを深めたり共有したりすることをできるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書くことに苦手意識をもっている児童が多いので、日記を書く際に、文型を提示したワークシートを用意した。シートを基に、出来事を順序立てて書いたり、その時の気持ちを表現する言葉を適切に選んだりできるようにしていく。 ・読書の幅は広がっているが、言葉に使い方や表現方法など、正しい読み取りができるように並行読書も取り入れ、より多くの文章に触れられる機会をもつようにしていく。 ・基礎の定着や反復練習を図ることを目的としたデジタルドリルの活用を継続し、応用問題も繰り返し取り組むようにする。 	

<p>3 学 年</p>	<ul style="list-style-type: none"> 漢字の読みができていますが、文章の中で活用できるように、いろいろな文章に慣れる必要がある。 根拠や考えを基に、自信をもって表現できるようにする。 四則計算を定着させる必要がある。 文章題の読み取りに慣れさせる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ①国語辞典の活用の推進 ②読書の推進 ③スピーチの実施 ④自分の根拠を明確にした考えの記述→友達との意見交流→振り返りの授業の流れ ⑤チャレンジタイムでの四則計算の習熟 ⑥デジタルドリルの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ☆朝読書にすすんで取り組み、いろいろな文章に触れることができた。 ☆授業の流れを確立し、教科書の叙述を基に理由を考え意見を交換する活動に取り組んだことで、どの児童も自分の考えを書けるようになった。 ☆チャレンジタイムでの四則計算は、繰り返すごとに速く、正確にできている。 ●毎朝、日直がスピーチしている。言いたいことをはじめに伝え、相手にも分かるように具体的に話すように指導している。児童たちは、話し方を理解して自信をもって話すことができるようになっていく。その一方で、具体性が乏しい児童もいるので相手にその都度指導している。 ●国語辞典の使い方を指導したが、継続的に使用を促したり、意図的に活用する時間をつくったりする時間がないため、児童によって国語辞典の活用に偏りがある。分からない言葉や叙述の中にあるキーワードとなる大切な言葉を調べる活動を継続的に授業の中に取り入れ、言葉の意味を理解し使えるように指導する。 ●文章題から大事なことを抽出することはできる。演算決定や単位が異なる等の誤りが生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新出漢字の定着のため、漢字の小テストを取り入れる。小テストの結果から、未習熟の漢字を重点的に練習する。また、デジタルドリルを併用し、授業の中や家庭学習等で取り組ませる。 ・どの学習においても、字を正しく書けるようになった児童がいる一方で、漢字の細かい部分を正しく書けない児童が見られる。授業の中で、部首などの間違いやすいポイントを指導し、正しい漢字を認識できるようにする。 ・わり算（あまりのあるわり算）の習熟が、出来ていない児童がいる。家庭学習で定期的に紙ドリルやデジタルドリルを活用して習熟を図るようにする。 ・問題を解くときには、図を活用できるようにする。デジタルドリル等の問題に幅広く取り組み、文章題に慣れる。 	
<p>4 学 年</p>	<ul style="list-style-type: none"> 分からない語彙があったら、自分から国語辞典を活用して、意味を調べる力が必要である。 叙述を根拠にして、自分の考えを説明する力が必要である。 始め、中、終わりの構成を意識して、作文を書く力が必要である。 数直線図を活用して、文章題から正しく立式する力が必要である。 四則演算を正確に処理する力が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ①すぐに国語辞典で語彙の意味を調べられる環境、習慣 ②叙述を根拠に自分の考えを説明する学習の積み重ね ③始め、中、終わりの型の教室掲示 ④数直線図の活用 ⑤チャレンジタイムにおける四則計算の習熟 ⑥デジタルドリルの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ☆国語の学習を中心に、分からない語彙があればすすんで国語辞典で調べることができている。 ☆叙述を根拠にして自分の考えを説明できる児童が増えた。 ●叙述を根拠とせず、自分の考えのみを表現する児童もいる。 ●始め、中、終わりの構成を意識して文を作ることができるが、「中」で具体的に自分の考えを説明する表現力や語彙力に課題が見られる。 ☆毎回のチャレンジタイムの積み重ねにより、基本的な四則演算の正答率や、即答率が上がった。 ●デジタルドリルを宿題等で更に活用し、各教科の習熟を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線の指導は5年生からであったため、4年生ではテープ図を活用することに変更する。テープ図のかき方をしっかりおさえ、図を使って文章題から立式できるように指導する。5年生の数直線との円滑な接続を図る。 ・児童によっては、国語辞典の活用が少ないことがあるので、分からない語彙は必ず国語辞典で調べることが習慣化させる。 ・「どの叙述からそう考えたのか。」と、追質問することにより、根拠を明確にさせる指導を行う。また、自分の考えを支える根拠や理由を、具体的に書いて説明する機会を各教科で増やし、積み重ねていく。 ・意見文を書いた際に始め、中、終わりの「中」の内容が少ない児童に対しては、主張の根拠を掘り下げさせたり、より具体的に記述させたりする。 	
<p>5 学</p>	<ul style="list-style-type: none"> 内容の中心や、段落ごとの要点を整理しながら読むことが必要である。また叙述に沿った予想を立てたり、感想をもったりする力が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ①読書にかかる環境整備と学校図書館の活用 ②文章にサイドラインを引くこと、小 	<ul style="list-style-type: none"> ☆読み聞かせの本や学級文庫に対する関心もち、そこから読書の幅を広げている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を読む際に、内容の中心や、段落ごとの要点を整理しながら読む力が伸びている。一方で、文章の構成を理解し、それに合わせて自分の意見や 	

年	<ul style="list-style-type: none"> 文章の構成を理解し、それに合わせて自分の意見や考えを表現する力の育成が必要である。 計算の決まりを正しく理解し、正確に計算できる力が必要である。 文章の題意を理解し、図や表から式を導き、問題解決していく力の向上が必要である。 図形の特徴を整理して、用具を正しく用いて正確に作図することのできる力が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 見出しや要旨の書き出し ③デジタルドリルの活用 ④自分の考えや意見を言語化する機会の確保 ⑤短時間の基礎的な計算練習 ⑥三角定規、分度器、コンパスなどの道具の使用に慣れる 	<ul style="list-style-type: none"> ☆デジタルドリルと紙ドリルを併用して活用することで反復して学習ができ、漢字の定着が図れた。 ☆短時間の基礎的な計算を繰り返し取り組んだことで、計算に苦手意識をもっていた児童が自信をもって取り組むようになった。また、暗算の速度も上昇している傾向が見られる。 ●小見出しを付けることを苦手としており、文章の抜き出しになる傾向がある。 →教科書を参考にして、小見出しにどのような言葉を使えばよいのかを指導し、小見出しとして適切な言葉を選択できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えを相手に伝える力の育成が必要である。各教科で他者との対話を通して、自分の考えを伝える活動を取り入れていく。 三角定規、分度器、コンパスなどの道具について、個に応じて支援していくとともに、目盛りの読みやすさや指先の器用さに応じた工夫のある道具も支援の一つとして取り入れていく。 	
6 学 年	<ul style="list-style-type: none"> 既習漢字を積極的に使わず、定着していない児童がいる。文章を書くときに既習漢字を使う必要がある。 新出漢字練習のとき、自分に適した学習方法を理解していない児童がいるため、定着し辛い。そこで、自分に合った学習方法を理解する必要がある。 モデル文の提示をすることで、参考にしながらある程度は、文章を書くことができる。文章を書く機会を設け、「書く」ことへの苦手意識をなくす必要がある。 データを読み取る力、文章を正しく読み取る力を付ける必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ①児童一人ひとりに即した課題の設定 ②デジタルドリルの活用 ③自分の考えや意見を文章化する機会を増やす ④データ、表を読み取ることへの慣れ ⑤小数、分数など基礎的な計算練習の取組 	<ul style="list-style-type: none"> ☆既習漢字を使うことを意識する児童が増えた。 ☆月に1回以上原稿用紙を使って作文をする機会を作ったところ、「書く」ことへの苦手意識が少なくなってきた。 ☆ドリルパーク等で繰り返し指導をしたところ、データや表の読み取りに慣れてきた。 ●文章を正しく読み取る力が不十分である。文章を読むことに抵抗感がある児童が多い。 ●分数の四則計算の方法を混乱している児童がいる。また、約分、通分の理解が不十分な児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出漢字の練習、または既習漢字の定着のため、ドリルパークと漢字ドリルを併用し、家庭学習等で取り組ませる。 読書の楽しさを伝えるために、朝読書以外の時間にも読書ができるよう働きかけたり、お勧めの本を紹介したりする。 分数の計算を繰り返し指導をすと思い出すため、月に1度程度家庭学習等で復習する。 	

■ 効果的なデジタルドリルの活用について【チェックリスト】

【区教委提出用・様式2】

■ 自校における効果的な学力定着度調査を活用した事後指導について

- 学校は年度当初にデジタルドリルの活用について保護者及び児童へ説明をしている。
- 学校は活用の際して、IDやパスワードについて保護者及び児童へ説明をしている。
- 児童及び教員がデジタルドリルの内容や機能について概ね理解している。
- 学校は児童が授業や家庭学習においてデジタルドリルが活用できるよう促している。
- 学校は家庭におけるデジタルドリルの活用について具体的に指導している。
- 学校は全ての学年で定期的に様々な場面でデジタルドリルの課題等を児童に与えている。
- 担任等がデジタルドリルを活用し、児童一人ひとりの傾向を把握し、適した課題や指導を行っている。

- ・総合学力調査振り返り（個別にデジタルドリルで年度内に復習）
- ・学級による状況把握（間違いの多い問題を学級全体で指導）
- ・放課後学習において活用（プリント学習）
- ・家庭への情報公開（保護者会で自校課題と対策を伝える）
- ・年度当初に職員による学力定着度調査への取り組み。傾向対策の把握（今後の学級指導、掲示物等）

■ 自校における効果的なデジタルドリルの活用について（事前・事後指導を含む）

- ・問題を早く終わらせた児童が個の課題に応じて活用。
- ・上記により、学習定着不十分な児童へ教師が対応する。
- ・宿題におけるも問題配信時に問題量を変えられるため個に応じた対応を行う。
- ・総合学力調査振り返り（個別にデジタルドリルで年度内に復習）